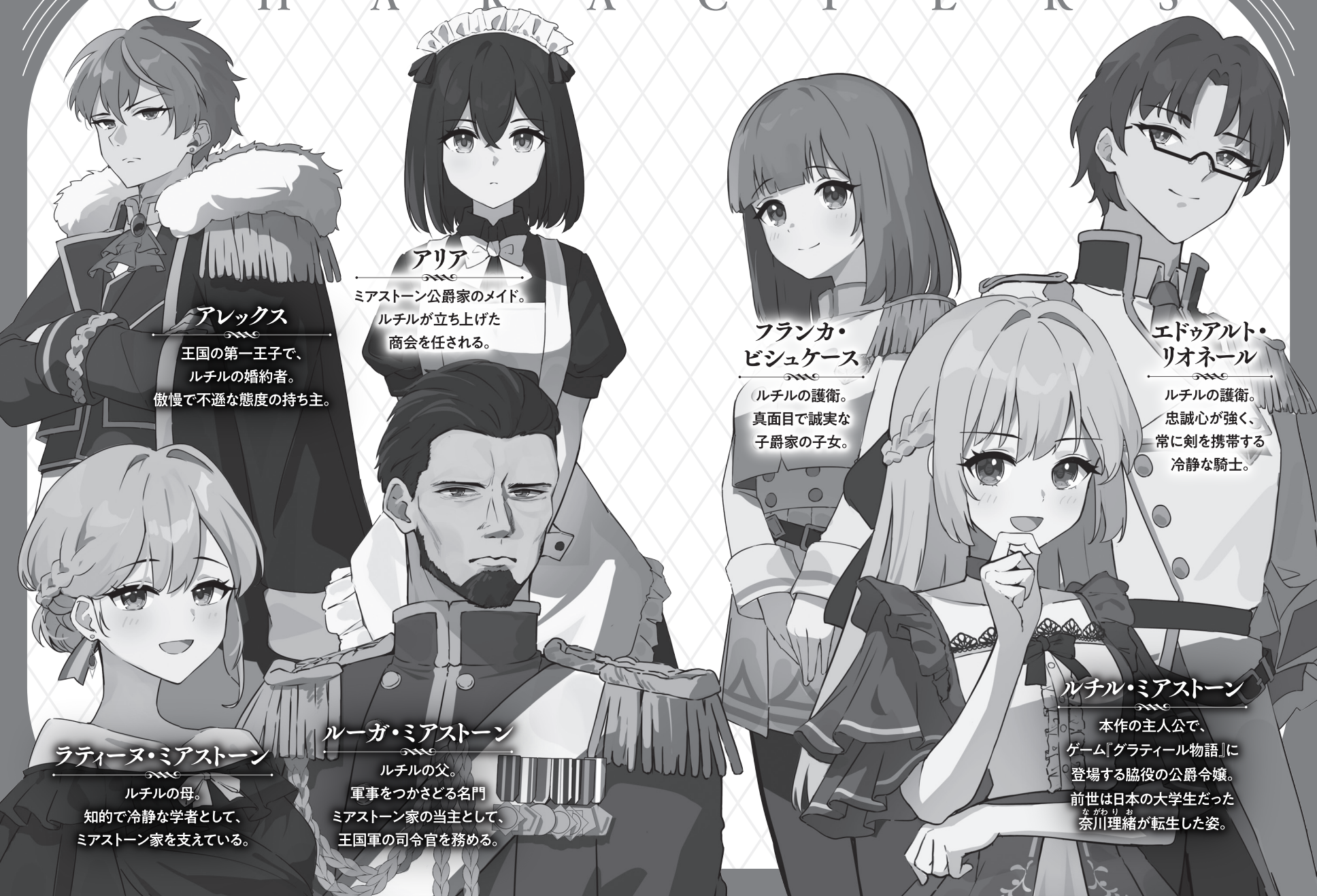
# 公爵家の商人令嬢は知識チートで異世界を楽しみつくす

著 てるゆーぬ
画 はまなし

KOSHAKUKE NO
SHONINREIJO

# CHARACTERS



## アレックス

王国の第一王子で、
ルチルの婚約者。
傲慢で不遜な態度の持ち主。

## アリア

ミアストーン公爵家のメイド。
ルチルが立ち上げた
商会を任される。

## フランカ・ビシュケース

ルチルの護衛。
真面目で誠実な
子爵家の子女。

## エドゥアルト・リオネール

ルチルの護衛。
忠誠心が強く、
常に剣を携帯する
冷静な騎士。

## ルチル・ミアストーン

本作の主人公で、
ゲーム『グラティール物語』に
登場する脇役の公爵令嬢。
前世は日本の大学生だった
奈川理緒（ながわりお）が転生した姿。

## ルーガ・ミアストーン

ルチルの父。
軍事をつかさどる名門
ミアストーン家の当主として、
王国軍の司令官を務める。

## ラティーヌ・ミアストーン

ルチルの母。
知的で冷静な学者として、
ミアストーン家を支えている。

# 第1章　転生

私は奈川理緒。20歳。理系大学生。大学の帰り道、車にはねられて死亡し……
最近プレイしていたファンタジーゲーム【グラティール物語】の世界に転生した。
転生時、女神様が次のようなことを言った。

1：転生する先は、ファンタジーＲＰＧ【グラティール物語】をベースにした異世界であること。
2：ゲーム異世界だけどセーブやロードはなく、蘇生もできない。
　一度死んだら終わりだから注意すること。
3：転生特典はないので、自分の力だけで頑張ってね。

いや、厳しい。
一個ぐらいチートスキルとかくれてもいいんじゃ……と、思ったが、無視された。
ゲーム知識や前世知識でなんとかしろ、ということであった。
そして転生。

【グラティール物語】の世界では、生まれたばかりの人間は皆、精霊界に預けられる。
そして精霊界で１００年の眠りにつかなくてはいけない。
その１００年で、精霊たちが人間の魔法回路を開いてくれるのだとか。
だから私も、１００年間、精霊界に預けられた。
まあ、ずっと眠っていただけだけどね。
そして眠りから覚めて、ようやく異世界での生活がスタートすることになった。

ミアストーン公爵家の屋敷――それが、私の家であった。
精霊界から転送されてきた私は、その屋敷の一室に立っていた。
テーブルと天蓋つきのベッドがある。
壁際に姿見があったので、自分の容姿を確認してみる。
金髪のセミロング。赤い瞳。ローブ姿。
ふむ……
（これが新しい私、ですか……）
お嬢様みたいなたたずまいだ。まあ、お嬢様なんだけどね。公爵令嬢だし。
ちなみに名前はルチル――ルチル・ミアストーン。年齢は１００歳。
いきなり１００歳から始まるとかぶっ飛んだ世界だよね。



赤ん坊や少年期をすっ飛ばして、最初から成人なんだから。
まあ１００歳といっても、見た目は20歳ぐらいだけどさ。
ちなみにルチルはゲームにおいては主人公……ではなく、脇役だ。しかもあんまり重要な役回りではない。たまに出てくるぐらいのモブ。
まあ、主人公みたいな波乱万丈な人生は私には無理だし、それがお似合いなのかもね。
と、そんなことを考えていたとき。
「失礼いたします」
ノックの後に、メイドが入室してきた。
「お待ちしておりました、ルチルお嬢様。副メイド長を務めております、アリアです。以後お見知りおきを」
そのメイドは、肩にかかるぐらいの黒髪と黄色い瞳を有していた。
メイドとしてベテラン感のあるたたずまいである。
「あ……えと、その……」
どうしよう。言葉がわからない。私は困惑する。
メイドはそれを承知しているかのように、私の手を引いた。
「精霊界から下界したばかりですから、言葉がわからなくても仕方ありません。さあ、皆様がお待ちですので、どうぞこちらへ」

メイドに手を引かれ、私は部屋を出る。
そのあと、私は公爵家の家族たちと顔合わせを行った。
父と、母と、姉。それからメイドや執事の皆さん。
皆精霊界から下界した私のことを祝福してくれた。
まあ、言語は全然わからなかったけど……
夜には屋敷内でパーティーが開かれた。
美味しい料理と。使用人の皆さんによるおもてなしと。
両親と姉からのプレゼントをもらった。
どうやら私は、温かな家族に恵まれたようだった。
そのことに安堵しつつ、私はパーティーを楽しんだ。

5年が経った。105歳。見た目は変わらない。
すっかり異世界の生活にも慣れた。最初は常識の違いに困惑したりもした。
まあ、いきなり100歳からスタートするぶっ飛んだ世界だ。
非常識なこともそこそこある。
（ちなみにこの世界の人間の寿命は5000年らしい。やはり非常識にも程があるわね）
でも人間とは不思議なもので、長く暮らしていると、適応していく。



私は結構、この異世界を楽しみ始めていた。
この年のはじめ、私に家庭教師がつけられることになった。
学問、芸術、剣術、魔法などを学ぶためである。
4月のある日の昼。
自室にて、この日も勉強だ。
学問を担当する家庭教師は語学、算術に関するテストを出してきた。
それを解き終わって、採点してもらう。
家庭教師は感嘆の声をもらす。
「ルチル様は、大変優秀でいらっしゃいますね」
「そうですの？　自分ではわかりませんわ」
5年も経てば、このようなお嬢様口調も慣れたものだ。
「はい。あらゆる学問で高い成績を修めておられますが、特に算術が素晴らしい」
前世において私は理系大学生であり、工学部だった。理系科目は得意分野だ。
……が、そこを差し引いても、この世界の学問レベルは低い。
つまり、簡単すぎるのだ。
専門書に書かれているレベルの問題でさえ、前世に比べると易しすぎる。
これだと間違うほうが難しいと思う。

そんな中、私が最も関心を寄せたのは、もちろん魔法である。
「魔法とは、イメージです」
魔法の家庭教師はそう述べた。
――魔法はイメージによって形成される。
どんな魔法を使いたいか、しっかりと頭の中でイメージした上で詠唱する。
それが魔法の使い方である。
しかし何度か魔法を行使するうち、私はあることに気づいた。
それは科学的な原理を考えたほうが、より魔法の威力や性能が高まるということである。
たとえば水魔法では、水の原理や分子式を考えながら魔法を行使したほうが良い。
そのほうが魔法の習得も早まることもわかった。
「お嬢様は、魔法の呑み込みがお早いですな」
家庭教師もそう褒めてくれた。
魔法を学ぶにあたって、前世で学んだ科学知識や理系知識が大いに役立つ。
そう理解した私はすっかり魔法に魅入られ、ますます習得に励むのだった。

◇

――公爵家の執務室。備えられたソファーにふたりの男女が座る。
ひとりは公爵家当主ルーガ。ルチルの父である。
ひとりはその妻ラティーヌ。ルチルの母である。
ソファーのそばにはふたりの家庭教師が立っていた。
現在、ルチルの教育に関する報告を行っているところだった。
「ルチル様は非常に聡明でございます」
学問担当の家庭教師はそう述べ、続けた。
「読み書きや外国語の習熟は速いですし、ことに算術に関しては高い適性を見せています。質問もするどく、実力を測るテストでも誤答したことがありません」
その報告に、ルーガは感心の声をもらす。
「ほう。わが娘は算術が得意ということか」
「はい。その分野においては間違いなく才能がおありかと存じます」
「なるほど、よくわかった。では次――魔法についてはどうだ？」
ルーガは、魔法担当の家庭教師に報告をするよう求める。
「はい。魔法に関しても、ルチル様は優秀の一言に尽きますな。教えたことはすぐに実践できますし、常に応用を考えておられる。1年かけて学ぶようなカリキュラムを予定していましたが、前倒しして、現在は3か月で学んでいただこうと考えています」

「ふむ。わが娘はそれほどか？」
「逸材であると、私は確信しております」
「なるほど」
魔法教師の言葉に、ルーガは満足げにうなった。
結論として、どの教師から見てもルチルは優秀とのことだ。
「ふむ。それなら、今年にも軍事訓練を受けさせてもいいかもしれんな」
ルーガはそう意気込んだ。実は、公爵家は軍事をつかさどる名家である。
ルーガはもちろん軍人であるし、ルチルを軍人令嬢として育てるつもりでもあった。
軍とは血筋ではない。実力が全てだ。ルチルに秀でた才覚があるなら、早くに軍に馴染ませ、女軍人としての実力を身につけさせたいと考えていた。
しかし。
「さすがにまだ早いでしょう」
ルチルの母であり、ルーガの妻であるラティーヌはそう苦言を呈した。
ルチルを軍人として育てることには反対しない。しかし、時期を考えなければならない。
いくらルチルが優秀だとしても、早すぎる英才教育はゆがみを生むと思えた。
「お気持ちはわかりますが、焦らず、地道に力をつけさせていけばよろしいかと思います」
「ふむ、そうか。そうだな」

妻の進言に、ルーガは同意した。
いずれにせよ、ふたりの夫婦は、娘の将来に大きな期待を寄せるのだった。

◇

また1年が過ぎた。春。私は１０６歳になった。
この世界のことが少しずつわかってきたので、頭の中で整理しておく。
まず、私が住んでいるこの国は【クランネル王国】というらしい。人口２００万人程度の小国であり、海に面している。
そしてわが公爵家は、やや辺境の地にある【ミアストーン領】を治めている。
ちなみに軍の名門らしい。なんと父上は王国軍の司令官なのだとか。
実際、父上は、よく戦争に駆りだされている。現在は激動の時代であり、争いが頻発しているからである。
イヤな世の中だね。平和が一番だというのに、全く。
さて、わが公爵領についても整理しておこう。
ミアストーン領は公爵家の領地だけあって広大である。領都を中心として、街や村の数も多い。
ちなみに、私たちが住んでいる公爵邸は領都の外れにある。



小さな庭園つきの二階建ての屋敷で、背後に山、周辺を雑木林に囲まれた立地である。
ここで家族４人、使用人20人とともに暮らしている。
……と言いたいところだが、実際に家にいるのは使用人の皆さんがほとんどだ。父上は軍の仕事で忙しく。母上は学者の仕事で忙しく。姉上は海外にいるので屋敷にはほとんど顔を出さない。
ゆえに家族の皆と共に過ごせる時間は少ないのだ。
でも、寂しいかと言われたら否だ。使用人の皆さんがいるし、親も姉妹も存命なのだから。
前世では……兄妹もおらず、両親も早くに事故で他界していた。
親代わりに育ててくれた祖母も、私が大学に入学すると同時期に寿命で亡くなってしまった。
本格的にひとりになってしまったときは、寂しくて泣いたな。
だから。
異世界であれ、新しい家族に恵まれて、とても嬉しいし、満ち足りている。
転生させてくれた神様に感謝する毎日だ。

月日は流れる。
１１０歳となった私は、屋敷の自室にてふと考える。
――このゲーム世界は過酷である。
戦争が起こったり。魔物の大軍が攻め込んできたり。なかなか波乱万丈なストーリーで、主人公

キャラは四苦八苦していた。
そして何より……敵が強い。
攻略法がわからなかったときは、しっかりレベリングしてたのに死にまくった記憶がある。
ゲームだったら死んでもセーブポイントからやり直せる。しかし異世界にセーブやロードはなく、死んだらそこで終わりだ。
自分の生は一回きり。
一回で、すべての難事を切り抜けなくてはいけない。
さらに、このゲームでは必ず発生する厄介なイベントがある。
それは――ラスボスの襲撃だ。時期を考えると、十数年後の未来に起こりうるイベントである。
ただでさえ高難度なグラティールの世界において、ラスボスはとてつもなく強く、倒すのが困難だ。しかし倒さなければクランネル王国は滅亡し、ゲームオーバー。つまり死となる。
（ひとまずラスボスを倒すことを、人生の目標にしなければならないわね）
ラスボスが襲撃してくることはおそらく確定しているだろうから、早いうちから備えておくべきである。
ただ……そんなに怯えたり焦ったりする必要はない。
ラスボスは確かに強い。しかし準備さえしておけば勝てる相手だ。私には時間がある。ゆっくりと確実に力を蓄え、来たるべきときに備えておこうと思う。



ちなみにこのゲームにおいて、最も効率よくプレイヤーを強化する方法は「スキル石を集めること」だ。スキル石とは、使用するとスキルを習得することができるアイテム。
いろんな場所に隠されていたり……強力なフィールドボスを倒すことでゲットできたり……通常のプレイングでは入手しにくいレアアイテムである。
スキル石をゲットすることで攻略が格段に簡単になる。いわば救済アイテムだ。
これを入手するかどうかで、異世界での生存率が段違いに変わるだろう。
そしてスキル石を最も効率よく集める方法は……
金で買うこと、である！
スキル商人と呼ばれる者たちが各所に配置されており、そこでスキル石を購入することができるのだ。ちなみに公爵領の領都にもひとりいる。
実際にいるかどうか、確認してきた。路地裏の奥である。
こういうわかりにくいところにいるんだよね、スキル商人は。
でも、いることが判明したのだから、あとはスキル石を買うだけだ。
とはいえスキル石は高い。数千万とか数億とか、とんでもない金額設定になっている。いくら公爵家のお小遣いがあっても気軽に買える値段ではない。なので金策が必要となる。
私は考えた。
「商売をしましょう！」

私のプランはこうだ。
前世の知識チートで商売を成功させる。それで稼いだお金でスキル石を買いまくる。あとはラスボスが来る日まで、のんびりと異世界生活を送る。
うん……完璧ではなかろうか？
さっそく商売のネタを考えなければ。
……と、そのとき。
ノックとともに、メイドが入室してくる。
「失礼いたします。本日の夕食は、何にいたしましょうか？」
夕食……か。私はそこでひらめいた。
「そうですね。今日は自分で作ってみてもよろしいでしょうか？」
「……？　え？」
メイドはきょとんとした。なので私は再度、告げた。
「自分で夕食を作りたいと思いますわ」
「……ルチル様が、ですか？」
「はい。試してみたい料理がありまして」
そう。私が考えたのは、料理チートであった。



厨房を借りて料理をする。家の料理係は困惑していた。公爵令嬢は、通常、料理をしないからだ。
そんな料理人たちをよそに、私は作りたいものをこしらえる。
「……できた」
オムライスである。作ったのは前世以来だが、我ながらよくできたと思う。
――食堂。夕方。
父上とふたりで食卓に着く。私は口を開いた。
「父上。実は、本日の夕食はわたくしが作りましたの」
「……何？」
父上は一瞬、困惑したような顔をした。私は説明する。
「実はわたくし、商売をしてみたいと思いまして」
「ほう……」
「なので商材として調味料を考案しました。それを父上に味見していただきたいのですわ。そしてその出来次第で、商会を開く許可をいただきたいのです」
公爵家の肩書きを背負って商売を行うとなったら、失敗は許されない。
ゆえに、商売の前に父上に許可をもらう必要があると思ったのだ。
父上が納得したように言った。
「なるほど。言いたいことはわかった。では、その料理を持ってくるがいい」

私は使用人たちに視線で合図を送った。食堂の外からオムライスが運ばれてくる。父上と私のもとに、オムライスが置かれた。
「ふむ、見たこともない料理だ」
「名前はオムライスですわ。上にかかっているのが、販売したいと考えている調味料です」
「なるほど。とりあえず食べてみよう」
父上がスプーンを手に取った。オムライスを崩して、スプーンにすくう。そして、口に運んだ。
「……！」
父上が驚いたような顔をした。
「美味い……」
「お気に召されたでしょうか？」
「ああ。これはすごいぞ。旨味や甘味などが複雑なバランスで調和している！　社交界で紹介したいほどだ」
反応がよくて、私はテーブルの下でガッツポーズをした。
「その上にかかっている赤い液体は、トマトケチャップと名付けました。それを商品として売り出したいと考えていますわ」
「ふむ。確かにこれは売れるだろうな」
父上はトマトケチャップだけをスプーンにすくって、ひとくち、食べる。



味わってから、私のほうを向いた。
「いいだろう。商会を開くことを認めよう」
「……！　ありがとうございますわ！」
「ただし、条件がある。【完全委託方式】でやりなさい」
――完全委託方式。
それは商売の実務を他人に完全に任せるという方式。
簡単に言うと丸投げだ。重要な決裁なども全て。
「お前は公爵令嬢だ。本業は商人ではない。ゆえに商売ばかりに時間を取られるわけにはいかない」
ゆえに完全委託方式を採用しろ、と父上は言う。まあ、私も商売にかかりきりになるのは望ましいとは思わない。父上の言う通りにしよう。
問題は、誰に商売を丸投げするかだが……
「わかりましたわ。それでは、副メイド長のアリアに任せたいと思います」
ゲームにおいて、アリアはルチルにどんなときでも味方した忠義のメイドである。
完全委託方式で仕事を任せるなら、彼女ほどの適任はいないだろう。
「そうか。では、話をしておくといい」
「はい」

こうして準備は整った。
翌日、私はさっそく商会を設立するために動き始めた。

半月後。
私はアリアとともに、商業ギルドを訪れた。
商業ギルドは、公爵領都の中央広場に面した建物だ。
商業ギルドのエントランスに入ると、さっそくカウンターに向かった。
受付嬢に話しかけ、自分の商会を設立する手続きを行う。
説明を聞いたり書類を書いたりすること1時間。商会の設立が完了した。
名前は【ルチル商会】。商会長はもちろん、私。副会長は、アリアとなった。
完全委託方式なので、実質的にはアリアが商会の舵取りをすることになる。
私はアイディアや経営の指針を提示するだけで、実務としては何もしない。
つまりアリアに丸投げというわけだ。しかしアリアは乗り気だった。
帰り道の馬車で、アリアは言った。
「私、いつか商売をやってみたいと思っておりました」
アリアは嬉しそうな声で続ける。
「ですから、このような機会を用意していただいたルチル様には、とても感謝しています」



アリアはこの日をもって、副メイド長を辞任することとなった。
これからは商会の仕事に専念してくれるそうだ。
彼女は優秀だから、きっと商会を盛り上げてくれるだろう。
さて、商会は設立しても店舗はまだ保有していない。
店を買うためには当然、お金が必要だ。
いや店だけではなく、トマトケチャップの製造にも費用がかかる。
これらの資金を確保するため、私は父上から借りた。
その金額は、ざっと1億ディリンだ。
1ディリンは1円の価値なので、1億円の借金をしたことになる。
その資金を、そのままアリアに譲渡した。
そして彼女は1億ディリンを使い、原材料の仕入れから商品製造までのラインを整えた。
――トマトケチャップには、塩・砂糖が使われている。ところが、トマトケチャップは安価に製造できる。なぜなら、この世界では塩・砂糖も安価だからだ。
塩草・砂糖草という魔法の草がそこらへんに生えており、これを加工すれば、塩と砂糖になる。
だから塩と砂糖が大量に採取でき、低価格を実現できるのだ。
なのでそれらを材料とするトマトケチャップの製造もまた、非常に安価で済む。
貴族だけでなく庶民にもお求めやすい価格で販売することができるし、量産も可能というわけだ。

そうして時は流れ、3か月後。ついに、領都で店を開くことになった。
トマトケチャップだけを販売する専門店である。
開店当初は、閑古鳥が鳴いていた。
しかし、ぽつぽつと客足が増え、やがて爆発的に人気が広がったようだ。
仕事は何もかもアリアに丸投げしていたので、私は屋敷でごろごろしていただけだ。
けれど、そんな私の耳にすら、店の評判が聞こえてくるほどだった。
塩、砂糖、コショウの次に来る、第四の調味料――
それがトマトケチャップであると、世間ではもてはやされるようになった。
屋敷の自室。
私はアリアと売上について話し合っていた。
「上手くいきましたわね、アリア。この成功はあなたのおかげですわよ」
するとアリアは首を横に振った。
「いいえ。ひとえにお嬢様が開発したトマトケチャップのおかげでございます。商品の質が良いので、私はそれを後押しするだけで良かったのです」
確かにトマトケチャップは売れ筋商品だろう。
しかし製造から販売、宣伝までをぬかりなく行ったのはアリアの手際だ。



完全委託方式は、実務担当者が有能でなくては上手くいかない。
アイディアを出す者と、それをプロデュースする者の両輪が揃って、初めて成功するのだ。
「アリア。あなたとなら商会をどこまでも大きくできると確信が持てましたわ。これからも商会のために力をふるってくださいまし」
「もちろんでございます。ご期待に添えるよう、最善を尽くします」
アリアはそう意気込んだ。
この調子で稼ぎ続ければ、スキル石の購入も可能になってくるだろうと、私は思った。
ところで、トマトケチャップはルチル商会だけが販売する専売品だ。他の店では扱われていない。
製法が知られていないので、他店では製造できないのだ。
しかし製法がバレてしまうこともあるだろう。一番ありうるのは、ルチル商会の従業員が漏らすことだ。
だがこの世界では、それを防ぐために契約魔法というものがある。
正式名称は【契約魔法（商業）】。商売の取り決めに使われる魔法だ。この魔法が、いわゆる契約書として機能する。
しかもその契約は、なんと精霊が守ることを強制してくれるのだ。
つまり、精霊による拘束力が発生する契約であり、破ることは絶対にできなくなる。
（まあ理不尽な契約や、非道な契約はできないようになっているけどね……）

今回、トマトケチャップを販売するにあたっては、従業員に、この契約魔法を使った。
つまり「トマトケチャップの製法を秘密にせよ」という契約だ。
この契約に同意した者のみ、従業員として雇っている。だから製法が従業員の口から漏れることは絶対にない。製法を吹聴しようとしても、従業員の口が魔法で塞がれる……という、直接的な制止が働くからだ。
しかし、それは一時的な処置に過ぎない。
そういう対策をとっても、いずれ製法はバレることになる……と私は思っている。
トマトケチャップはそんなに作るのが難しいわけではないからだ。
いずれ他店が自力で製法に辿り着くことになるだろう。
まあ数年後には作り方が広まってしまっているかな。
それまでに、新しい商品を開発したいところね。

夏になった。
私はさらに商売を広げるために、父上から10億ディリンを借りることにした。日本円にすると10億円。莫大な金額である。
しかしトマトケチャップの成功があったため、父上は喜んで貸してくれた。
この10億ディリンを用いて行うことは、次の三つだ。

1：トマトケチャップの販売数を増やすこと
2：店舗数を増やすこと。
3：新商品の発売。

特に新商品の販売には力を入れたいところだ。
トマトケチャップに加えてマヨネーズ、ドレッシングを開発し、販売を行いたいと思っている。
この手の調味料は永久的な利権になるだろうしね。

ある日の昼。
とりあえずマヨネーズを作って、サラダにかける。そして屋敷の食堂で、アリアに試食してもらった。すると、彼女は驚きに呆然とした。
「これ……すごいですね」
そう感想を漏らす。
「私もメイドをやっていましたから、それなりに料理には通じているつもりでしたが……このマヨネーズというものは、いったいどうやって作られたのか見当もつきません。それでいて調味料として極めて優秀であることはわかります」

「作り方は後で教えますわよ。それで……売れそうですか？」
「これが売れないわけがありません。トマトケチャップと並んで、大流行間違いなしですよ！」
トマトケチャップは本当によく売れてるからなぁ……公爵領の一大名物である。
そこで、私は提案した。
「ところで、そのトマトケチャップですが、公爵領以外の大都市にも店を構えてみてはどうでしょう？」
アリアは困った顔をした。
「私もそれは考えました。が……支店を持つほど、まだ資金に余裕があるわけではありません」
トマトケチャップは薄利多売である。店舗がひとつだけだと、大きく儲けるのは難しい。
まあ、だからこそ店舗数を増やそうと考えているのだけど。
「実は父上から10億ディリンほどお借りしましたの。全てアリアに預けますので、それを使って店舗を増やしてみてください」
「……よろしいのですか？」
「ええ。実務は全てアリアに丸投げしてますからね。せめてこれぐらいは」
「ありがとうございます。10億もあれば、商圏を大幅に拡大できます！」
アリアは歓喜した。
このあと、ドレッシングの試食もしてもらったが、絶賛された。

もちろんドレッシングも販売することになった。
アリアはさっそく10億ディリンを使って店を拡大し始めた。
トマトケチャップの店を増やし。マヨネーズ、ドレッシングの店を新たに開店して。さらに領都だけでなく王都にも、支店を建設。
大規模に商売を展開したのだった。
……結果。
これらの調味料は空前の大ブームを巻き起こした。貴族から庶民まで、新しい調味料に強く魅了された。
トマトケチャップ、マヨネーズ、ドレッシングは完全に人々の食卓に定着。三大調味料と呼ばれるまでになった。
当然、それを開発したルチルの名も広まり、貴族社会でも一目置かれるようになっていった。

◇

その翌年。雪解けの春。
屋敷の執務室。

ルチルの父母であるふたりが、話し合っていた。
「ルチルは、素晴らしい才能に恵まれたな」
ルーガはしみじみと告げた。
この2年間で、ルチルに対する賞賛をあちこちで聞くようになった。
もちろん、調味料を開発した功績について……だ。
トマトケチャップ、マヨネーズ、ドレッシング。
これらは宮廷料理や社交パーティーにさえ提供されることも、もはや当たり前となっている。
ちなみに貴族の料理関係者の中には、ルチルの熱狂的なファンも多い。
公爵家お抱えの料理長も、ルチルにはすっかり尊敬の眼差しを送っていた。
「まさか調味料ひとつで、ここまで賛美されようとは」
「ルチルの調味料は、お世辞抜きで素晴らしいもの。私もすっかり虜になってしまいました」
「まあ、そうだな」
確かにトマトケチャップやマヨネーズは素晴らしい。
これらの需要は、家庭の食卓だけに留まらない。たとえば飲食店の店主もまた、ルチルの調味料を使った料理を作り始めている。
こうして生まれた料理の一例が、マヨネーズパンだ。
パンにマヨネーズをかけるだけ、というシンプルな料理だが絶大な人気を博した。



そしてそういう料理が人気になればなるほど、連動してマヨネーズも売れていくという按配だ。
――調味料の製法を、ルチル商会は公開していない。
したがってケチャップやマヨネーズが欲しいなら、ルチル商会から購入するしかない。
これによりルチル商会は、調味料の利益を独占し、莫大な利益をあげ……公爵領はおろか、王都でも最も勢いのある新興商会として注目されているのだ。
「これほど売れてしまうと、大商人からの妨害を受けたりはしないものか」
「その心配はないでしょう。公爵令嬢を敵に回したい商人など、そう多くはありませんよ」
ルチルが作った調味料の凄まじい人気ぶり。
商会を立ち上げてわずか2年で、すでに中堅商会と呼べる規模にまで至ろうとしている。
驚くべき急成長だ。しかもその成長はいまだ天井が見えない。
ゆくゆくルチルは、大商人の仲間入りを果たすことは間違いない。
その過程で、既存の利権をおびやかすこともあるだろう。
だが、大商人たちでさえルチル商会の妨害はできない。
なぜなら、相手はルチル……公爵令嬢だ。ルチルに敵対することは、公爵家を敵に回すことと同義である。
しかもただの公爵家ではなく、ミアストーン家は軍の名家。
商人ごときに敵対できるわけがない。

現状、商人たちは、ルチル商会の台頭を警戒すれど、実質的には黙認するしかないのであった。
「しかし最近、ルチルへの縁談が絶えん……」
ルーガがため息をつきながら言った。
トマトケチャップが流行したときから、縁談の申し出は増えていた。
マヨネーズ、ドレッシングのブームにより、さらに縁談の数は急増した。
それだけ婚約することに価値がある、と判断されているのだ。
……ただ、公爵令嬢が相手だ。
実際に婚姻できる家柄は限られている。
けれどダメ元でも、とばかりに、家格のつりあわない貴族からも縁談が持ち込まれていた。
「縁談を拒否する返事を出すのも面倒なぐらいだ」
それを聞いたラティーヌがなだめる。
「まあまあ、それほど娘に価値があると思われているのは、喜ばしいことではないですか？」
「それは否定しないが……」
ルーガがそう答える。そこでラティーヌが言った。
「実は……王家からも縁談が来ているのですよ」
「なんだと!?」
「しかも第一王子……アレックス王子との縁談です」



ルーガは驚いた。
公爵家の立場を考えれば、王家の者と婚姻を結ぶことは可能である。しかし、王家のほうから縁談が来るというのは珍しいことだった。
「それほどルチルの価値を高く見積もり、将来性にも期待を寄せている、ということでしょう」
「そこまで高く評価されているとは……」
ルーガは改めて娘の実力を再評価した。そして言った。
「王家からの縁談なら、こちらからも望むところだ。前向きに返事をしたほうがいいな」
「ルチルを王妃に据えるのですか？」
「問題なかろう」
なにしろ相手はアレックスだ。
アレックスは第一王子ではある。しかし才能は凡庸であり、未来の国王となるのは厳しい。
そうなればルチルを女王、アレックスを夫……つまり王配として位置づけることも不可能ではないのだ。
そこまで上手くいかなくとも、アレックスを傀儡にして王家を操るのもアリだ。
この婚姻は、受けたほうがいい。
（ルチルを女王にできれば、わが家の権勢は揺るぎないものとなる）
ルーガはほくそ笑んだ。夫の思惑を察したラティーヌは肩をすくめるのだった。

◇

その年の夏。私は112歳になっていた。
母上とともに、公爵領を離れ、王都を訪れていた。
高級馬車に乗って、王城へと入城する。
華やかな廊下を通り、王宮の応接室へ。
そこで待っていたのは、ふたり。
ひとりは、女王陛下ミジェラ。豪奢なドレスに身を包んだ女性。髪は大自然を模したような緑のロングヘア。目は黄金の色。女傑とわかるオーラをまとっている。
もうひとりは、第一王子アレックス。母ミジェラと同じ緑色の髪。目も黄金の色だ。どこか刺々しい印象を受ける態度だ。少しあごを上げて、こちらを見下ろしているような姿勢である。
（王城に呼び出された先で、女王と第一王子か……）
私は何を話されるのか察した。
まずは互いに挨拶を行った。
ミジェラ女王は口を開いた。
「こちらは私の息子……第一王子のアレックスだ」



女王と私は面識があったが、アレックスとは初対面であった。
私はアレックスに自己紹介をした。
「お初にお目にかかります、アレックス殿下。わたくしはルチル・ミアストーンと申しますわ」
「……ああ」
やたらと不満げにアレックスがあいづちを打つ。女王は私に言った。
「ルチル……今日、お前を呼び出した理由についてだが、お前とアレックスの婚約が決定したからだ」
「……！」
やっぱりそうきたか。最悪だ。
アレックスは、ゲームでもだいぶ評判の悪いキャラクターだ。
一言で言えばクズなのである。
そんな相手と婚約なんて遠慮したいところだった。
「すでにお前の両親には話を通してある。そうだな、ラティーヌ？」
「おっしゃるとおりです」
母上は肯定した。
この婚姻は拒否することはできない。
それにしても、いきなり婚約を通告してくるとは、さすが異世界の政略結婚だ。

本人の意思はまるで無視である。
（まあでも、ある程度は予想できていた、かな……）
私は思う。
ゲームでも、ルチルとアレックスは婚約関係にあった。
だからこれはある意味での予定調和だ。
一応、救いがあるのは、アレックスとはいずれ破局する運命にあるということだ。
それまで形だけでも婚約者をやっていればいいのだ。
「私とラティーヌは話がある。ふたりで親交を深めていなさい」
ミジェラ女王はそう述べて、母上とともに部屋を出ていった。
応接室に、私とアレックスが取り残される。
しばし沈黙があったが、やがてアレックスが言った。
「おい。お前、商会を経営しているんだろう？」
「はい。そうですわ」
「それ、やめろ」
「……え？」
「商会経営をやめろ。お前の名声が高まれば、私が比較されて、見劣りすると思われるだろ。それで王子の名に傷がついたらどうするんだ」



なっ……なにふざけたことを言ってるんだ、この王子は？
はぁ……やっぱりこいつ、ゴミだわ。
ゲームでも第一王子は極端なほど自己中心的な性格だった。今の発言を聞くかぎり、ゲームのときと変わらないようだ。
よし。絶対に言うことを聞いてやらないぞ。
「お断りしますわ」
「……何？」
「ですから、お断りしますと言ったのです。どうしてあなたの都合で、わたくしが商会を畳まなければいけませんの」
私がそう告げると、アレックスは顔を怒りで真っ赤にした。
「お前は公爵令嬢だろ！　だったら王族と結婚できることに感謝して、私のために生きるべきだ！　自分の分をわきまえろ！」
「イヤですわ」
「口答えするのか！　公爵家の分際で！」
アレックスは掴みかからんばかりの剣幕だった。まさか、私が言い返してくるとは思ってなかったのだろう。
腐っても第一王子。周りからはヘコヘコされてきたはずだし。

「婚約者ですから、立場は対等。言いたいことは言わせていただきますわ」
「この……!!」
「とにかく婚約してしまったのですから、今後殿下におかれましては、わたくしの迷惑にならないようにお願いしますわね」
「ふん。お前の迷惑など知ったことか！」
それっきり私たちは会話を交わすことはなかった。
なんというか……婚約者以前に、人としてこの王子と仲良くやっていける気がしないなぁ……
（まあ、いずれ婚約破棄に持ち込もう。向こうから破棄させる形で）
私は内心で、そう心に決めるのだった。

また年が明ける。
公爵家の食堂。食卓で、私は父母と夕食をとっていた。
「ルチルよ」
父上が静かに口を開いた。
「一週間後に教会の洗礼式があることは忘れておらんな？」
洗礼式。１１３歳になった者たちを対象に、教会で行われる式。魔法の適性職を調べる儀式だ。
「もちろんでございますわ」

「うむ。優れた適性職に選ばれることを期待している」
優れた職業もあれば、いわゆる不遇職もある。
ゲームでのルチルは確か【大魔導師】だったはずだ。魔導師の上級職のひとつである。
「できれば軍人として有利な適性が望ましい……と思っていたが、お前はもう王子の婚約者だからな」
「戦闘の適性職でなくても良いと？」
「ああ」
意外な発言だった。これまで私は、父上からさまざまな軍事教育を受けてきた。
最たるものは、人を殺す訓練だ。私はすでに20人以上も盗賊を斬り殺している。戦争に参加した経験もある。
父上は、明らかに私を軍人として育てるつもりだった。
しかしここに至って、少し方針を変えてきた感がある。
発言からするに、私が王子の婚約者になったからのようだ。
（まあ、あの王子と結婚するつもりはないけどね）
なので、父上の目論見は諦めてもらうしかないだろう。

一週間後。領都の教会にて、たくさんの人が集まっていた。

皆１１３歳になった者たちだ。適性職の検査を受けに来たのだろう。
ややあって、神父が前に出た。洗礼式が開始される。
「では順番に名前を呼びますので、呼ばれたら前に出て、祭壇に置かれた水晶に手をかざしてください。すると水晶に文字が表示され、それがあなたがたの適性職となります」
開始とともにひとり目の名前が呼ばれる。
ふたり目、三人目……と続いていく。
優れた適性だとわかった者からは歓喜の声があふれた。
逆に、不遇職に選ばれてしまった者は落胆している。
その場で崩れて泣き出す者もいた。
（まあ、適性職次第で、人生変わっちゃうからね）
多かれ少なかれ、適性職はその人の未来を決定づけてしまう側面がある。
私はどうせ大魔導師になることは決まっているから、のんびり構えているけど。
と、そのとき。水晶がひときわ大きな光を放った。
「これは……！」
神父が目を見開く。
その場にいた全員が固唾を呑んだ。
やがて光が収まる。



神父が水晶の文字を確認した。
「素晴らしい。【聖魔導師】の適性です！」
歓声が上がった。
聖魔導師は、ゆくゆくは聖女となりうる職業のひとつだ。
その選ばれた適性職を得られたのは、ひとりの女性。
私がよく見知った顔だった。
（ラクティア……!?）
そこに立っていたのはグラティール物語の主人公……ラクティアだった。
グラティール物語には主人公がふたりいる。男主人公と女主人公だ。
ゲーム開始直後の画面で、どちらかを選ぶことができる。
しかもどちらを選ぶかで、ストーリーが結構変わってくる仕様だ。
ちなみにラクティアは、女主人公である。
そうか。そういえば、彼女は【聖魔導師】の適性だったっけ。
（ど、どうしよう。声をかけるべきかしら？）
ゲームでのルチルは、もっと後で登場するキャラクターだ。
ラクティアとは、この段階ではまだ知り合いではない。
だったら今のうちに知り合うのはまずいか？

でも主人公を味方につけたらかなり心強い。
だって主人公だもの！　ゆくゆくは聖女になるもの！　ストーリー的に！
うーん。声をかけるべきか、悩ましい。
「次……ルチル・ミアストーン」
そうしているうちに、神父が私の名前を呼んだ。
「……はい」
結局、ラクティアに声をかけるという目論見は崩れた。
私は前に出る。
そのとき背後からひそひそと噂する声がした。
「おい。ルチル・ミアストーンって……」
「ええ。ルチル商会の会長である、あのルチル様よ！」
「なんとお美しい……さすが公爵家のお姫様だな」
「きっと優れた適性職なんだろうな」
商会に関する賞賛。容姿に関する賞賛。そして適性職に対する期待。
そういった声があちこちから上がる。
（うわぁ……めちゃくちゃ注目されてるじゃん……）
勘弁してほしい。



まあ、私は大魔導師が確定してるから、ハズレ職を引くことはないけどさ。
とりあえず、さっさと水晶の前へ。
「では、水晶に手を」
神父様に指示され、私はうなずく。
そして水晶に手をかざした。水晶が微かに輝く。やがて文字が浮かんだ。
神父がそれを読む。
「ふむ……錬金術師ですか」
……え？
「れ、錬金術師？」
自分の耳を疑い、私は神父に問いかける。
「ええ。ルチル様の適性職は、錬金術師です」
神父様が再度、そう告げる。
どうして？
ゲームでのルチルは大魔導師だったはずだ。なぜ適性職が変わってしまった？
（まさか……転生者であることが影響してる？）
そうとしか思えない。
とにかく、私の適性職は錬金術師であることが確定した。

すると、周囲からのざわめきが聞こえてくる。
「さすがルチル様だ！」
「錬金術師か。すげえ」
「やはりものづくりの才能がおありなんでしょうね」
それらは私を褒め称える言葉だ。
しかし、私は知っている。平民ならともかく、貴族社会において錬金術師は不遇職であると。
錬金術師の仕事は薬師に近く、貴族のすることではない。
下級貴族であるならうらやましがる者もいるが、伯爵家以上では、むしろ恥ともなりうる。
公爵令嬢のくせに錬金術師とは……などと嘲笑される未来が見えた。
（いやあ……あはは。どうしたものか）
困惑まじりの苦笑をする。
まあ、とにかく、なってしまったものはしょうがない。自分の適性を受け入れることにしよう。

洗礼式が終わってから私は、気持ちを切り替えて錬金術の勉強を始めた。
錬金術の本を購入し、理論を学び、実践する。
そして、半月後。
私は錬金術のとんでもない可能性に気がついた。



「錬金術ってすごい！　なんで今までコレを学んでこなかったのかしら！」
自室にて、私は狂喜乱舞する。
錬金術師とは薬師のような仕事だと、そう理解していた。
だがそれは違っていた。
錬金術師とは、どちらかといえば、科学者である。
そう。錬金術を使えば……
現代日本の科学技術を、この世界でも再現することができるかもしれないのだ！
（前世の技術がこっちでも使えるんだ！　なによ、錬金術師って超当たり職じゃん！）
この世界の生活レベルは中世ヨーロッパ並みか、それ以下だ。
食事も。生活も。娯楽も。現代日本の暮らしにはあまりにも遠い。
しかし錬金術に、私が学んできた理系や工学の知識を交えれば……
きっと、私の生活は変わる！　この国も変わる！
それだけの可能性を、私は錬金術に見出していた。
（極めよう、錬金術を……！）
このとき。私にとって、ひとつのライフワークが定まったのだった。
さっそく私は父上にアトリエを用意してもらえるように頼んだ。
父上は難色を示した。

そもそも私が錬金術師という適性職だったことに、眉をひそめていたぐらいだから。
しかし私が……
「トマトケチャップ並みの発明を、錬金術で実現できるかもしれないのですわ」
と告げると、話を聞く気になってくれた。
そして空き部屋のひとつをアトリエとして使わせてもらえるようになったのだ。
それから私は、のめりこむように錬金術の習得に励んだ。
錬金術を学ぶこと。そこに科学や工学の知識を盛り込むこと。
そして実践。実践、実践、実践。
試行錯誤。その繰り返しだ。

2か月後。
私は、ある道具の開発に成功した。
――シャンプーである。
私はお風呂が好きだ。だから前世では、結構、入浴にはこだわっていた。
しかし、それゆえ、異世界に来てからは不満も多かった。
なにしろこの世界の入浴グッズって品質が悪いんだよね。
まずボディソープは存在すらしない。石鹸しかない。



リンスやトリートメントなどもあるはずがなく、身体をふくタオルですら微妙な出来だ。
だから錬金術を使って、まずお風呂グッズを中心に開発してみたいと思った。
その第一号が、シャンプーである。
プッシュ式で泡が出るタイプ。匂いもクセがなく、甘くて良い香り。老若男女、誰にでもウケが良さそうでシンプルな……そんなシャンプーが、ついに完成した。
自分でも試してみたが、上出来だった。
現在は、アリアにも提供し、試してもらっている。
今日はその報告会だ。
私の部屋で、アリアが言った。
「ルチル様の開発したシャンプーは……なんと申しますか。一言で言えば最高でした」
「つまり、使い心地は良かったと？」
「良かった……なんてものではありません。私が経験したことのない代物です。甘く優雅な匂いで、あんなにうっとりするような時間は初めてです」
「気に入っていただけましたのね。では、売れそうですか？」
「あれが売れないなら、世界が間違っています」
そこまで言うか。まあ、私も売れると思うけど。
「ただお風呂というものは、貴族の邸宅か大衆浴場にしかありませんから、庶民に広く販売するこ

とはできませんね」
そう。この世界では、お風呂は庶民の家に備わっているものではない。貴族の家だけだ。
だから平民の場合、大衆浴場で入浴を済ませるのが普通である。
つまり庶民向けにシャンプーを販売することができないというわけだ。
「そうですね。では貴族向けの高級商品として売り出すのがよろしいかしら？」
「それがいいと思います。値段は1つ２００万ディリンでいかがでしょうか」
「た、高くありません？　シャンプー1つで２００万？」
「むしろ安いほうかと。１０００万で売っても買い手がつくかと思いますよ」
「マジですか……」
シャンプー1個１０００万なんて、ボッタクリのレベルを超えている。
それでも買い手がつくのだったらえげつない商売だ。
原価なんて１０００ディリンもしないのだから。
「ちなみに錬金術を使って作ったのですよね？　だとすれば、ルチル様以外には作れそうにありませんか？」
「いえ……作り方を知れば、わたくし以外でも生産は可能だと思いますわ」
「なるほど。なら、錬金術師を何人か雇ってみますね」
こうしてシャンプーの生産と販売の構想が固まっていった。



シャンプーと同時に、トリートメントも開発した。
このふたつの専門店を開店する。
場所は公爵領ではなく、王侯貴族が多く集まる王都。
その一等地である貴族街に開店し、取扱説明書つきで販売することにした。
まあ、実務面は全てアリアに任せたが……
そうしていよいよ明日から販売。
と思ったときに……どういうわけか、アレックス王子が私の屋敷にやってきた。
いったい何しに来たのか？
とりあえず応接室に通すと、アレックスは私に対して言った。
「お前、錬金術師になったんだとな」
ああ……そのことか。
何を言われるのか察して、げんなりした。要は笑いに来たのだろう。
まあ、殿下が私に会いに来るなんて、ろくな理由ではないのはわかっていたが。
「公爵令嬢のくせに錬金術師が適職とは、情けない」
予想通りの発言だった。
アレックスは続けた。

「ちなみに私の適性職は【大剣術家】だ。どうだ？　格の違いがわかったか？　これからは私に対して敬意を持つことだな」
「生憎とわたくし、あなたには一生かけても敬意を持つことができそうにありませんわ」
はっきりと言ってやった。するとアレックスは、当然のように激怒した。
「なんだと!?　貴様、今どれほど無礼な言葉を口にしたかわかっているのか!?」
どういうわけか、そこまで言ってからアレックスは、何かに気づいたようにいったん怒りを収めた。
そして一度深呼吸し、嫌味な表情を浮かべた。
「ああ、なるほどな。わかったぞ。つまりお前、私に嫉妬しているんだろう？」
「はぁ？」
「まあ不遇職のお前から見たら、私のような適性職は喉から手が出るほど欲しいだろうな？」
「別にわたくし、錬金術師で満足しておりますが」
「ははっ！　強がらなくていいぞ？　錬金術師に何ができる？　お前みたいな無能は、初級ポーションを作るのが関の山だろう」
「さて、それはどうでしょうか？」
ふふっ、と微笑む私。
私は心の底から錬金術師でよかったと思っている。



立ち読みサンプル
はここまで

この世界では実現不可能かもしれないと思っていた、科学が行き届いた暮らしを実現できるかもしれないのだから……
私が虚勢を張っているわけではないとわかったのだろう、アレックスの顔から嫌味な笑みが消える。
それから憤慨したように言った。
「とにかくお前は不遇職なのだ！　己の分をわきまえろ！　この無礼者が！」
アレックスの予想では、私がもっと悔しがると思っていたのだろう。
しかし、思いのほか元気にやっているのを見て、腹が立ったのだ。
私はコロコロと笑った。
「殿下はいったい、何をそんなにお怒りなのですか？」
「なんだと!?」
「わたくし、殿下に怒りを向けられる理由に心当たりがありませんの」
「理由だと！　何度も言っているだろう。お前は生意気なんだよ！　私より格下のくせに、どうして身分相応の言葉遣いができない!?」
「婚約者になれば対等ですもの。言いたいことは言いますわ」
「お前ごときと私が対等だと!?　そういうところが気に入らないと言っているのだ！」
「あらあら……物分かりが悪い王子ですこと」